

第2章

生の苦からいのちもうけ

入退院の繰り返しの女の子

「この子にはもうホトホト困り切っています。しおつちゅう風邪を引いて、引くと決まって喘息の発作で入退院を繰り返しています」

若いお母さんが来ての訴えであった。当の恵子さん十歳（仮名）は冴えない顔色で寒々とした感じ。皮膚は浅黒くカサカサしている。横にしてお腹^{なか}に手を触れようと嫌がつて遮り、触れさせない。非常にくすぐつたがりやさんである。

このような小児に、現代医学では小児喘息として病名治療する。以前は気道の狭窄とされていたこの病気が、その後気道の炎症としてとらえられるようになつて、気管支拡張剤で気道を拡げておくというそれまでのやり方から、ステロイド剤の吸入で炎症を抑え込んでおくというやり方に変わつた。そして自然治癒を待つということになる。

こうした対症的な治療法で自然治癒の方向へ向ければよいが、それとは逆の方向へ行くか

も知れない。事実、小児喘息の約半数が青年期、壮年期へと移行する。自然治癒しない喘息は壊病となっていることが多い。「壊」とは壊れるの意で、はじめは単純であつた病気が、誤った治療により却つて複雑にしてしまい、治しにくいものにしてしまうことである。縛れた糸は解しにくい。

もつとも、病名にはかわらずに陰病には補陽という単純な方法で対処すれば、縛れた糸もすぐ解れる。壊病となつた喘息も明快に治すことができるるのである。

翻て、東洋医学ではこうした小児の喘息に対処するに、体質改善を目的とするものと、咳や痰、喘鳴、呼吸困難といった症状に対するものと、数多の薬方が用意されている。しかし重積発作の如き激しい症状に対しては、どうしても現代医学の気管支拡張剤やステロイド剤に頼らざるを得ない。

それに、体質改善といつても、相当な時日をかけなければ目的を達することはできない。現代医学にしても漢方の如きにしても、喘息の治療には決め手がないと言うか？一爻不足なのである。「陰多くして陽少なし」の虚勞の体にあつては、陽の不足で自然治癒力が盛り上がらないのである。

小児喘息はそのほとんどが呼吸器系統の虚労であるが、なかには消化器系統の虚労のこともある。この場合は消化器を丈夫にする漢方剤、たとえば六君子湯などを持薬にすることによつて喘息が治つてしまうことがある。

こうしたことからも、喘息は気道の狭窄とか気道の炎症だとか、単なる部分の病変として片付けられないことが分かる。どこまでも虚労という全人的な問題——生命力の落ち込みがそのおもとに在るのである。ただし、大人の喘息には虚労とは裏腹の陽性タイプのものがあるから、判別を厳しくしなければならない。

また、喘息の病状を引き起こす原因物質（アレルゲン）がはつきりしているものと、それが見つかりにくいものとある。こうした外的要因は喘息を虚労としてとらえる限りそれは誘因に過ぎない。煤煙やほこりを原因物質としてこれらを避けることに汲々としても、決して喘息は治らない。問題は虚労という生命力の落ち込みにあるのだから、これから脱け出ることをしなければ、喘息を根絶やしにすることはできない。

こうした小児喘息には、漢方では発作用と体質改善用の二剤を併用するが、根治には道遠しの感を免れない。この一爻不足を完璧に埋めることができるのが生命素である。

さて、十日ほど過ぎた日、恵子さんのお母さんからの電話というので受話器を取ると、いささか興奮した声が飛び込んできた。咳、喘鳴などの常の症状が消えただけでなく、顔がまるで変わってきたというのである。

初めの一回をのませた途端にいつも冷たい手足が温かくなり、そのうちに熱い熱いといい出してセーターを脱いだので驚いたという。明らかに瞑眩（めいげん好転反応——第7章で詳述）だ。恐らくおしつこもうんと増えている筈だ。私の問いかけに、

「そうです。おかしいほどトイレに立つていました」との答えが返ってきた。

恵子さんは普段から低体温であることは初診時に知っていたが、これも虚労の一症であり、「陰多くして陽少なし」を物語るものである。こうした体に生命素を与えるとすぐに温かくなる。体内で光エネルギーが励起したことの証である。あかし陰から陽への転換——大袈裟に聞こえるかも知れないが、これこそ量子力学で言う原子転換である。

こうした劇的な補陽の働きの中でも、生命素の生命素たるを証するのは、何と言つても、相貌が良くなることである。このことは後章の老婦人の二～三の事例でも述べるが、その代わり映えには驚かされる。

江戸時代の易学者水野南北の「修身録」に、たとえ死相が現れた者でも、食を正すとそれが消えて、回生の喜びが得られるばかりか、運勢までも開けることを述べている。これは薬にはない食の働きである。

生命素は、太陽エネルギーの摂取——食の働きにほかならない。それも、日常の食よりも極めて高性能であるから、水野南北の説くところが劇的に現れるのである。

「ほんとに驚くほど食欲が出ました。この子のこんないい顔色は生まれて初めてです。顔色だけでなく肌の色も……」

手放しで喜ぶお母さんの顔が電話の向こうに見えるようであつた。
「これまでの病院の治療は一体何だつたのでしょうか」

と、思いのたけを吐露した言葉も聞かれた。いつ果てるとも知れない入退院の繰り返し、これまでの治療に憤りさえ覚えたという。こうしたやりきれなさは対症的治療にありがちなこと。幼小児の慢性病は特に全人的に対処することが必要なのである。

「これからお子さんに素晴らしいことが起こりますよ」

「えつ……どんなことですか」

「お子さんが耀いてきます」

「はあー、この子の代わり映えを見ると分かるような気がしますが、でもなんだかキツネに抓つままれたようで、どうしてこんなことが……」

「体にとって、太陽エネルギーを直に取り入れることほど良いことはないのです。エネルギーと共に陽性が取り入れられます。それは肉体的にだけでなく、全身全靈的に働くのです。だからお子さんが耀いてくるのです」

「いやあー、驚きですねえ、世の中にこんなことがあるなんて」

「これは何も不思議なことではないのです。大自然の理法なのです。陰陽の法則なのです。ただ、これまで太陽エネルギーを生命素のかたちで取り入れる方法がなかつたので、こうした大自然の理法を目で見ることがなかつたのです」

「…………」

「お子さんの場合もこれまで喘息という病名にとらわれて、病名に対する治療をしていたわけです。恵子さんという人間は蚊帳かやの外だつたのです」

「…………」

「お子さんは漢方で虚労という生命力の弱い体质なのです。ですから、その体质的弱点を立て直すことこそ必要なのです。その結果として喘息は根絶やしになります。ほかに病気があれば一緒に治ってしまうというおまけが付きます」

「やる気も起きるでしょうか」

「意欲が出ないというのは陰の症状ですから、太陽の大きいなる陽が入れば意欲が湧いてくるのは当然です」

「……」

「人は能力にしても免疫力にしても、持つてゐる一～二割しか発揮されていないということが、遺伝子の研究が進むにつれて分かってきました。陰から陽への転換は、こうした状態に活を入れるものなのです。子供の場合は学校の成績が良くなるので驚かされます」

「頭まで良くなるのですか」

「小学校三年生の男の子でしたが、やはり喘息がありましてね。恵子さんと同じやり方でそれから解放されたと思ったら、学校の成績がとても良くなつたのです。それである大学の附属小学校の編入試験を受けたのですが、二十三人に一人という難関を突破してしまつたのです。そのあとも生命素を与え続けていたら、クラスで一番になつたと、うれしい知

らせを聞いたことがあります」

こうしてお母さんはわが子に生命素をせつせと与え続けた。幼小児の場合はほんのわずかの量で済むから費用もさほどでない。四ヵ月ほど経ったときは恵子さんの薄墨を刷いたような浅黒い肌が健康色に変わった。カサカサしていたのがすべすべになつた。喘息もそれつきり起きない。恵子さんをはじめて診たのは十二月の初めであつたが、その冬、風邪ひとつ引くことなく春を迎えた。

「わが子ながら見違えるようになりました。夢のようです」

お母さんは最大級の喜びようであつた。

「病の応は体表に現れてそれと知られる」という。体表とは体の表面、つまり皮膚である。身体内部の病変は皮膚に現れているということである。

恵子さんは初診のときは皮膚が浅黒くカサカサしていた。肝臓の解毒の働きが鈍つていることの証左である。いかにも汚らしく見えたその皮膚がきれいになつたということは、こうした身体内部の体质的弱点が改善されたことを物語る。

それに恵子さんはたいへんくすぐつたがりやで、はじめて診たときお腹をさわらせなかつた。これは皮膚の知覚過敏である。いつてみれば気道の粘膜も外部の皮膚の続きである。つまり同じ上皮系の内側の皮膚なのである。そこに外側の皮膚と同じように知覚過敏があつて、ちょっとした刺激、たとえば冷たい空気や埃などにすぐに反応して、喘息の発作を引き起こすわけである。

ところが、恵子さんは初診から二週間後の再診のときはお腹をさわらさせてくれたので、早くも知覚過敏が治っていることが分かつた。発作がそれつきり起きないとお母さんが言うのもうなづけた。

喘息は一見治ったように見える時期があつても、虚労という本質的な体質的弱点が改善されない限り、気道の過敏性が残つていて再発することが多い。気道の炎症をステロイド剤でコントロールするとか、気管支拡張剤で気管を拡げておくとかといったことは、どこまでも一時しのぎのことであつて、ましてや、こうしたやり方に頼らなければならないことから生ずる薬禍は問題である。対応が長期になるし、苦しまぎれに使い過ぎになるからである。

それに引き替え、病名にこだわらずにどこまでも虚労という生命力の落ち込みに問題を

絞つて、そこから脱け出ことをすると、その結果として病気が治る。そればかりでなく、目を瞠^{むな}るような生命の質の高揚が見て取れる。このことは、わが子を見つめるお母さんの目にはつきり映し出されたものと思う。

この事例には後日談がある。三年ほどの後、今度はお母さんのほうが顔面神経麻痺で能面の一歩手前のような顔を見せた。

「もしかすると治るかも知れないと思つて来ました」

と。聞けばいろいろと手を尽くしたが徐々に麻痺がすすみ、居ても立つてもいられなくなつて、私のことを思い出して……とのことであつた。

お子さんと同じく虚労を思わせるタイプ。脈診と腹診でそれを確かめた。漢方の処方に生命素を併せ用いることにして、生命素二ヵ月分を一ヵ月でのみ切つて旧に復した。何といふこともなかつた。

現代医学にしても漢方にしても完全なものではない。東西両医学の一爻不足をサプリメント（補遺）して、このように治病の実^{じつ}を擧げるのを「相補的医療」と言う。これはどこまでもその人の全体を目標とする全人的医療である。全機的医療とも言う。「全機」の用

語については、第5章の「再び大自然の理法——陰陽について」で解説。

ゆく末が思いやられるという女の子

「この子ですが、中耳炎で長いあいだ耳鼻科へ通っているのですが、ちつともよくならなくて……、おばあちゃんから言われてまいりました」

若いお母さんが付き添つての訴えであつた。女の子は由美さん（仮名）といつて小学校三年生。幼児の頃からの中耳炎で難聴になつていて、そのためか学校の成績もいまひとつ。先が思いやられるという。

由美さんのおじいちゃんとおばあちゃんが連れ立つてよく私のクリニックに姿を見せる。たまたまこのお孫さんの難聴のことに話が及んだのであつた。

「治してあげないと一生のハンデとなつて可哀相ですよ」

と私が言つたのがきつかけで、おばあちゃんがご長男のお嫁さんを説得して私の許へ寄

越したのであつた。お母さんにすれば専門の耳鼻科にかかるつてはいるのだから、いまさら漢方のクリニックにかかることになかなかふんぎりがつかなかつたようである。こうしたお母さんに、病名にとらわれないで全人的な癒しの必要なことを理解してもらうのは骨の折れることであつた。

「中耳炎に限らず、病気が慢性化してなかなか治らないのは、自然治癒力が盛り上がりないからです。お子さんの場合、ほんとうはいくら耳の中をいじくつても^{せんかた}詮方ないことです。現に長いあいだそうしてて、あげくの果ては難聴になつてしまつたではありますか」

悪いとは思うが、こうまで言わないとその気になつてもらえない。

「中耳炎はお子さんの体質的弱点から発しててると考えてみてください。蓄膿症や喘息、アトピー性皮膚炎など、子供のときからよく見られる慢性疾患も同じです」

「…………」

「お子さんは漢方で虚労と呼ばれる生命力の弱い体質なのです。中耳炎や難聴という問題はひとまず脇において、この虚労という体質的弱点を治すことをしたらよいのです」

「…………」

「その結果として、つまり虚労から脱出することによって、虚労の病である中耳炎も難聴も治ってしまうのです」

「…………」

「体にはもともと、起き上がり小法師のように正常な状態に復帰しようとする力が備わっています。中耳炎であれ何であれ、病気が延々として癒えないのはこの力が眠っているからです。だから、お尻をひっぱたいて、眠れる獅子を呼び起こしてやつたらよいのです」

「そんなこと、できるのですか？」

「素晴らしい方法があるのです。それというのは、虚労は『陰多くして陽少なし』の現象なのです。だからその足りない陽を補つてやればよいのです。陰陽の法則で陰性の体が陽性に転じます。すると、眠っていた獅子——自然治癒力が呼び起こされるのです」

「それはどうして分かりますか？」

「それは分かりますよ……、お子さんが生き生きしてきます。相貌まで良くなります」

「難聴も治るでしょうか？」

「聴覚の神経が破壊されていなければ大丈夫です。されてないといいですね」
こうしてお母さんはわが子に生命素による相補的医療（漢方の黄耆建中湯を併用）を受け入れてくれた。

数日後、例の如くおばあちゃんがおじいちゃんと一緒に連れ立つて姿を見せた。おばあちゃんは前記の如くお孫さんのお母さんを説得して私の許に来させた人である。なのに私はそのことは忘れていて、いつものように目の前の前のお年寄りご夫妻のことを念頭に置いていた。

「その後お具合はいかがですか？」

「お蔭さまでたいへんよいです」

といつもの答えが返ってきた。

「ご主人はどうですか？」

「ええ、私もたいへんいいです。血圧も気にならなくなりました。夜もよく眠れます」

おばあちゃんは神経症で四カ月余り漢方の投薬をしてきたのだが、なかなかうつ病が取れない。そこで陽不足を補うために生命素を与えたところ、ほどなくうつ病がよくなってしまった。うつ病は陰病なので陽の付与がよいわけである。ご主人は陽病なので漢方の瀉

剤^{ざい}(有余を除く薬)を与えていた。飲酒家によく見られる赤ら顔が取れて、血圧が正常になつた。

「男っぷり、えらくよくなりましたね」

と冷やかすと、

「いやあー、もててもてて、つい午前様になつてしまふんですよ」「ほんとにいいトシをして、困りますよ」とおばあちゃん。

「酒毒を消す薬でもあげましょか」

と、私が冗談とも本当ともつかぬことを言つたとき、

「先生、孫がよくなりました」と、おばあちゃん。

「お孫さん?」

「ほら、この間うちの嫁が連れて伺つたでしょ。中耳炎の……」

この中耳炎で私はお孫さんの由美さんことを思い出した。

「ああ、そうでしたね。どうですか?」

「実は今日、耳鼻科の先生から完全に治つたからもう来なくていいと言われました。難聴もすっかり治りました。先生も怪訝そうな顔をしていたと嫁が言つてました」

「そうですか、それはよかつた……」

由美さんのカルテを出してみる。なんとまだ三週間ほどしか経っていない。

「お孫さん、何か反応があつたでしよう?」

「ええ、のませたその晩、耳だれがいつぱい出て、枕をべつとり汚してしまいました」

やはり瞑眩があつた。体温も上がつただろうし、おしつこも沢山出たに違いない。子供は何も言つてくれないから、親が心して見ていないとこうした瞑眩を見逃してしまう。結果からして由美さんの体に陰から陽への転換という大変革があつたのは確かだ。

「当分続けるようにお母さんに言つてください。学校の成績が良くなりますからと……」

おばあちゃんの目はいつも丸い感じを受けるが、それがさらに丸くなつた。

こうして、はじめはおばあちゃんのすすめを受け流していた由美さんのお母さんも、耳鼻科の先生のひと言でようやく合点がいつたとみえて、漢方の薬は止めたが、生命素はぜひともと言つて、このあとも熱心に与え続けた。どうやら、漢方の薬よりも生命素のほうが、お母さんの目を開かせたようだ……。

後日談はやはりおばあちゃんからもたらされた。それによると、難聴が治った由美さんはピアノを習いはじめたのだと。そうしたら先生から「由美さんはのみ込みがよくて上達が早い」と言われたと。お世辞かと思つていたら、たまたま小学校の担任の先生からも、「近頃勉強もよくするし、運動も活発になりました。耳が治つたそうですね。そのせいでしぇう」と言われたとのことであった。

こうした由美さんの代わり映えは、難聴が治つたからという、そんなうわべのことではなく、「陰多くして陽少なし」の由美さんが劇的に虚労から回生したことを物語るものである。こうした太陽の大きな陽の働きは、幼小児の場合は殊に能力の開発に繋がる。生命素を愛用されているある有名な教育家がいみじくも言われた。「子供にこれを与えたら教育革命が起ころのでは……」と。私は言いたい。「生命革命が……」と。

会社を職^{くわ}になるという青年

ある日突然耳が聴こえなくなる病気、突発性難聴という。原因は不明とされている。不明でないと突発性難聴とはいわない。実は、これも虚労の病なのである。

「突発性難聴と言われてます」

と、ある日小柄な青年が来て言う。二カ月ほど前に発症、仕事が事務機器の営業ということで、治らないと会社を職^{くわ}になるという深刻な話であつた。

青年を横にして腹を按するに、腹直筋が緊張している。脈は浮弱でときに触れ難い。

「だいぶ疲れていますね」

「ええ、一日中車で駆け廻っています。ノルマがあるので無理せざるを得ません」

「それはたいへんですね。丈夫な人ならともかく、あなたは生まれつきそんなに強いほう

ではないから無理は通らないですよ」

「でも仕事は何とかこなします」

「若さで押し切っているのです。疲労が積もると何らかの病気が出できます。突発性難聴」というのはそういう病気の一つです。だから耳をいじくつても埒らちがあきません。しかし、のんで治す方法があります」

「何かそういう方法があるのではないかと思ってきました。治るでしょうか?」

青年は私につめ寄るように言う。虚労の度合いも軽く、発症して日も浅い。陽を補えば案外早く虚労から脱け出られる。私は、

「短期決戦」

とメモして見せた。

「そうですか、うれしいな……」

こんなやり取りがあつて、青年に生命素を持たせてやつた。これまで難聴が治った例がいくつもあるが、何れも虚労を確かめてのことである。この青年もそれと診断できたから、私には確信に近いものがあつた。

さて、二週間後、青年は予約なしで突発的に飛び込んできた（診察室にだしぬけに現れたのでそういう感じを受けた）。私と曰を合わすなり、

「先生、治りました。一回のんですぐ分かりました」

「ほう、それはよかつた……」

まさに単純明快、虚労からの回生の働きが發揮されたようだ。青年は言う、

「先生！ 不思議なほど疲れなくなりました」

と。

「そうでしょう。漢方で虚労と呼ばれる疲れやすい状態から脱け出たのです。どうです、やる気が出たでしよう」

「ええ、なんだか生まれ変わったような気分です」

「このあいだ、ここでのんだ一服で、あれから小便がたくさん出たでしよう」

「そうなんです、先生。車の中でやたらに出したくなつて、トイレ探しに困りました」

尿量が増えるという現象は生命素によく見られる瞑眩の一つで、光エネルギーの脱水素の働きからはじまる活性酸素消去の働きである。こうした瞑眩と共に、体は一転して虚労からの回生に向けてすべての機能が動き出すのである。

突発性難聴はいのちには別状ないといつても、営業マンにとつては仕事の上で致命傷となる。この青年も生命素にご縁がなかつたら、ご本人が心配していたように会社を職になつていたかも……。

さて、耳の病気と同じく、鼻や眼の病気も、部分の病気として見ないで、体全体の陽不足——虚労の病としてとらえることで治る。子供の頃からの蓄膿症が、他の病気の治療のおまけで治つてしまつた事例を、第4章の「ひとり住まいの老婦人」で触れるが、最近増えている眼の病気で、「網膜黄斑部変性症」も生命素の相補的医療が良い。これは要するに老化による変性だから、生命素が良いわけ。緑内障にも良いことが、少数例であるが驚くような事例がある。白内障は経験例がないが、やはり老化に伴うものだから、必ず良い結果が得られるものと思われる。

わが国の自殺者が年間三万人にものぼるという。生の苦の一端を物語るものではないだろうか。人身事故での列車の不通をしばしば耳にする。昔は飛び込み自殺と言つた。聞くだに心が痛む。言い方を変えた配慮は分かるが、きれいごとで済まされないのがそのよつ

てきたる原因。これも虚労の病であるうつ病が多いのである。

うつは陰病、躁^{そき}は陽病である。はじめは陰と陽が併存してうつと躁が交互に現れる。それも、病の経過が長引くにつれて「陰多くして陽少なし」となり、遂にはうつだけとなるのも陰陽の理。虚労の度合いが深まってゆくわけである。

よく、「気に病む」と言うが、気とはかたち無くして働きの有るもの。これを治すのは同じくかたち無くして働きの有る陰陽の法則である。うつのような陽不足の病には、その不足の陽を補つてやるに如くはない。この病に広く用いられている抗うつ剤などの化学薬品はすべて陰性。陰病に陰性の薬物を以つてするのは、大自然の生命消長の理法——陰陽の法則に悖る。やはり、陰病であるうつ病には、生命素に依る補陽が良いことは言うまでもない。

新聞の人生相談欄に、無気力の息子に悩む親の訴えを時に目にすると。たとえば大学を卒業してやっと職を得たが、勤務時間が長い、休みが少ない、仕事がきつい、などと毎日愚痴ばかり、怒ると、いいことないから死んだほうがましと言う。なんと、人身事故の予備群ではないか？　親の身になつたらまらないだろう。

これに対する回答者の答えは、「これはもう本人の心理的要因や人格、家庭の問題を超えて、政策の貧困、企業の怠慢、教育の未熟など、社会の問題である」という意味のものが多い。だから即解決というわけにはいかないと言う。こうした結論では相談者の落胆が思いやられる。

意欲欠乏の原因は政治や社会ではなく、どこまでも本人にある。本人の問題だ。これを虚労なのである。いまにはじまつたことではない。幼小児期から引き継がれた生命力の落ち込みなのである。虚労から脱け出ることによつて意欲ある日々を送ることができる。このことに気付くべきである。そうでないと、生老病死の四苦に喘ぐ生涯となることが目に見えている。

幼小児の場合は虚労といつても他所の子と同じように何でもこなせる。他所の子以上の能力を持つていることも多い。ところが同じことをしても他所の子は平氣なのに、虚労の子はがつくり疲れてしまう。疲れやすいというほかに、意欲がない。風邪を引きやすい。引くと長引く。胃腸が弱い、といったことがあり、それが青年期へと移行する。

こうした虚労は幼小児のうちに治しておかないと可哀相だ。虚労のまま成人して社会の競争場裏に立つようになると、他人とのハンデが大きくなつて、生の苦はいや増すのであ

る。こうした虚労に、太陽の大きいなる陽の付与は、直撃的に回生の働きを發揮する。広い意味でのいのちもうけである。